
常春の太陽の上で

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

常春の太陽の上で

【Nコード】

N4604D

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

結婚式直前の女の子の話（このお話は、過去に所属していた小説同盟「心を言葉に」の月お題「金」で書いた短編小説です。文字数の制限があったので、非常に短い作品となっています）

結婚が決まって真っ先に電話をかけたのは両親ではなく祖父だった。

幼い頃、仕事の忙しい両親に変わって私を育ててくれたのは祖父だった。兄弟もいない私にとって祖父は唯一の家族のような存在だった。祖父は優しい人で、誰よりも私のことを思ってくれていた。私が大学へ進学して寮生活を始めるまでずっと一緒に暮らしていたから、多分人生で一番長く一緒にいた人だと思う。

けれど大学を卒業して会社勤めを始め、一人暮らしを始めた私は祖父と疎遠になり始めていた。時々電話はするけれど、それはほとんど祖父からで自分からかけることもしなくなっていた。

久しぶりに電話をかけ結婚の報告をした私に、祖父はまるで自分のことのように喜び祝福をしてくれた。

翌週、婚約者を紹介したくて向かった時も本当に喜んでいた。

自分の若い頃にそっくりだと冗談めかして笑った。

結婚ともなると決めなければ行けないことが多い。

式場のこと、ドレスのこと、引き出物、お見送り、招待客など。

それに加えて寿退社をする私には仕事の引き継ぎという重大な事も残っている。引越しの準備も整えておかねばならない。

そのため毎日が鬼のように忙しくて、夜遅く家に帰ることが多かった。

結婚も三ヶ月後に迫った時、たまたま夕方に帰ることが出来た私は、アパートを尋ねてきた祖父と会った。

その日の夕焼けは金の灯りをともしたように、空を不思議な色に染めていた。

「おじいちゃん？ どうしたの？ 珍しい」

「いやなに、サチが結婚する前に話をしておきたくてな」
にこにこ笑う祖父は普段と変わらない。

けれど、どことなく違和感を覚えて私は首を傾けた。

「ふうん？ ま、取り敢えず入ってよ、荷造りの途中だから散らかっているけど」

私は鍵を開いた。

「……幸せかい？」

突然、祖父が尋ねる。

私は振り向いた。

西日があつたつて祖父の表情は見えない。

私は目を細めながら笑って答える。

「うん、幸せだよ。どうしてそんなことを聞くの？」

「いや、幸せならそれでいいんだ。お前には世界一幸せな花嫁になつてもらいたいんだ。だからね、サチ、予定通り結婚式を挙げるんだよ」

「……おじいちゃん？」

私は意味が分からず首を傾けた。

太陽が眩しくて祖父の身体が透けているように見えた。

不意に、バックの中で携帯電話が鳴った。

「あ、ごめん、電話だ」

私は祖父に謝り携帯電話を慌てて取り出す。

着信は実家からだった。

こんな時間にかかってくるのは珍しい。

私は通話のボタンを押した。

「もしもし？」

『ああ、サチ……落ち着いて聞いてね』

「どうしたの？ 深刻そうな声して」

『あのね、たつた今おじいちゃんが亡くなったの』

「また、冗談ばかり。だって今ここに……」

おじいちゃんがいる、そう言いかけて私は言葉を失う。
祖父の姿がなかった。

たった今、そこで話をしていたばかりの祖父の姿がなかったのだ。

「……おじいちゃん？」

祖父の姿が見つからない。

廊下にも、部屋の中にも姿が見えない。

私は言いしれぬ不安を覚えた。

「おじいちゃん？ どこ？ 隠れてないで出てきてよ。お母さんと共謀して私をからかっているんでしょ」

私は階段の方まで走る。

電話を手に握ったまま祖父の姿を探した。

「おじいちゃん？」

その姿は見つからなかった。

どこにも。

白い布団の上に横たわる祖父は廊下で会った時と変わらない姿だった。

ただ、冷たくなった手足がもう生きていないことを如実に語ってくる。私は泣くことも出来ず呆然と祖父を見つめていた。

「サチ」

母の手が肩に置かれても反応できなかった。

祖父が死んだなんて、とても信じられなかったのだ。

結婚式をあんなに楽しみにしていた祖父に、花嫁姿をもつ見せられないなんてとても信じられなかった。

「ちよつとこつちにいらつしゃい」

まるで夢の中にいるようなぼんやりとした感覚で私は母に言われるままに祖父の部屋に入った。

真つ先に飛び込んできたのは鮮やかな色だった。

金紗の着物。

結婚式用の綺麗な打ち掛け。

「……これ」

「おじいちゃんがね、あなたの為に用意したものよ。これ着て、予定通り結婚式をあげないさい」

「でも」

身内に不幸があつた後では結婚式をあげられない。

まして、親同然だった祖父が亡くなつた三ヶ月後に結婚式なんかとても出来ないと思つた。

「それがおじいちゃんの望みのよ」

「あ……」

だからね、サチ、予定通り結婚式を挙げるんだよ

私は、口元を押さえた。

目の前が霞んでせつかくの着物が見えない。

もう、立っていることすら出来なかった。

「おじい……ちゃん」

私、結婚するよ。

この着物来て三ヶ月後、春の暖かな日差しのなかで、みんなに祝

福されながら世界一幸せな花嫁になるから。
だから、

だから、あの金色に輝く太陽の上で、私を祝って下さい。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604d/>

常春の太陽の上で

2011年1月18日04時26分発行